

第3章 江戸時代～明治時代における天草漁民の生活

——富岡を中心として——

Tran Thi Mai Hoa (チャン・ティー・マイ・ホア)

(翻訳：藤井 英明)

1. 天草の漁業と漁民

漁業人口

当時もそして現在においても、漁村であるなしにかかわらず、全体の人口に占める漁業世帯が予想外に少ないことは実に驚くべきことである。『天草の歴史』によれば、水産業を専業とするものは人口の9%に過ぎなかった(本渡市-1961)。農家と比較しても、この数字ははるかに小さい。例えば、漁業が盛んであった富岡町の1951年(昭和26)における農業人口と比べても、この数字はその3分の1でしかない(角川-1987)。漁業世帯が少ない状況を説明するものとして、以下のようないくつかの仮説がある。

一つに、天草における漁民の大半は、漁師というよりは農民であったとするものである。天草における漁村の形成と発達、幕府が地域住民に対して沖合漁業に従事する許可を与えた1645年(正保2)以降になってからようやく見られるようになることが明らかにされている。中村正夫によれば、当時の天草漁民は水夫役及び漁方運上を反対給付として自ら他村の地先まで拡げていた(中村-1961)。当初七カ浦として成立した定浦は、以後数次の変遷を経て最終的には二四カ浦に増加したのであるが、この定浦以外の村々は臨海村落であっても「魚不仕」村であり、「無海無株」の村として漁業に従事することができなかった。

この政策変更以前において漁業は主たる職業にはなりえず、地域住民は生計のために「農民」として農業を続けなければならなかったことを意味している。結果的に、この習慣は1645年以降も存続した。漁業を主たる生業とするものであっても、農業や林業にも依存していたのである。このため、農民の数は漁民の数を上回ったのである。これは19世紀以降に登場する新しい漁村のケースとはまったく異なる。例えば北海道では、漁民が日本の他の地域から移住して村を形成し、漁業に特化して、農業や林業は自らの必需を満たすためにするのみで、基本的に水産業で生計を立てていた。

天草の人々の大半が元来漁民でなかったことを示すもう一つの話として、かつて天草漁業の中心であった富岡の大網元鮫島十内が、不漁の際の備えとして「いくばくかの田畑を購めておいた方がよくはないか」といい、「西の海の潮水を嘗めてみる。あの水が塩辛いうちは鰯が獲れるのだ!」と述べたとある。網船の改造や漁具の改良に独自の創意を加えたようである(田中-1982)。

他方で、とりわけ明治時代末期において、漁業は大きな収益性のあるものではなかった。日本におい

て鉄道輸送が開始されると、人々は水産業に加えて石炭や無煙炭の採掘業に群がった（本渡市—1961）。『天草の歴史』によれば、海辺に面した地帯では石炭が豊富で、質・量ともに申し分なかった。日清戦争後には石炭需要が増加し、石炭採掘業は多くの地域住民を惹き付ける収益性の高い職業となっていった。後に、この産業の発展に寄与した大日本練炭株式会社という豆炭（練炭）製造会社が1895年（明治28）に牛深に炭鉱を開いた。「天草における汽車第一号であった」（本渡市—1961）とは言わないまでも、1900年（明治33）から第一次・第二次世界大戦までの間に天草では鉄道が非常に発達した。両大戦後には石炭産業は全盛期を迎え、花形産業となった。このような理由から、水産業は天草の経済におけるその位置を向上させることはなく、地域の人々を惹き付けることもなかった。

また別の説明では漁師の危険や難点を指摘している。通説では、とくに沖合の漁業では、漁師たちは常に危険の淵に立たされているとされる。このことから漁師について語るとき、人々はしばしば開放的とか豪放不敵、寛大といった特徴を思い浮かべるのである（田中—1982）。田中昭策は、漁師が沖合に出た際の多くの事故についても述べている。例えば、「天保七年（1836）七月十一日、長吉外十七人五島にて溺死などの記事があり」とある（田中—1982）。このようなことから、元来漁師ではないながらも水産業に従事していた者は、より安全で収益性のある職業を求めて、容易に水産業から離れていったのである。このように、富岡や牛深、二江といった天草における有名な漁村でさえも、上記のような漁業世帯の少ない同様のパターンを呈するのである。

漁村の構造

以下の分析は、高田源清によるフィールドワークのデータに基づいている（高田—1952）。これには、水産業に従事した人の数（専業、兼業を合わせたもの）や漁協への登録数、各村における水産業に従事する世帯数、各村の人口、非動力船と蒸気船の数が掲載されている。高田はこれらのデータを二つのグループに分類している。人口に対して漁民の占める割合が30%以上と高い村をグループ1とし、その他をグループ2としている。

グループ1はさらに、専業・兼業の割合により、水産業を専業としている村と、副業として水産業に従事する者の割合が高い村とに分類されている。前者を代表するものとしては牛深町、二江町、富岡町（村）などが、後者としては御所浦村が挙げられる。後者では人口に対する漁民の割合は多いが専業としているものはほんのわずかしかない。これは政府の奨励と、豊かな海洋資源によるものであろう。グループ2は三つのタイプの村に分けられる。タイプ1は、グループ1でみたような村人全体に対してではなく、世帯として見たときに漁業を専業としているものである。その他は主たる収入としてではなく副収入として漁業をするものである。楠浦村、高浜村、棚底村などがタイプ1の代表である。このタイプには、世帯のうち漁師または漁業関係の仕事をするものが多いか、グループ1の後者のような副業として携わっているものが多いか、あるいはその両方が含まれる。これには二つの場合が考えられる。一つは村の世帯のうちごく少数が、沖合漁業に携わり、かつ家族のうちほぼすべて（3人以上）がこれに従事しているもの。もう一つは、1人か2人が沖合漁業をし、他の家族構成員は浅海域や海岸とその付近での水産業に携わっているものである。後者は、亭主とその子供が厳しい沖合漁業をし、妻は村の近くで危険の少ない水産業に携わるといった漁師の家族の典型である。海岸線に近く、海藻が豊富に採れる

ことから多くの者が副収入のために、副業として水産業に携わる志岐村はこの代表的存在である。

全般的に、小グループに分けられてはいるが、自然条件や、水産業以外の比較優位、漁師の技術、各村の経済状態その他の影響力を持った要因の相互作用により、さらに多くのバリエーションが考えられる。結果的に、各村についての徹底的な研究を通してしか明らかにはならないだろう。

水産業

熊本県全体において、天草の漁獲高はトップに位置する。水産物総価額でも天草は熊本県全体の半分以上を占めている（表1参照）。この表から、漁獲高が大きく変動していることがはっきりと見て取れる。これは農業と比べて不安定で天候に大きく影響されるという水産業の欠点を表している。

表1 天草郡及び熊本県の水産物総価額

	天草郡 (円) ①	熊本県 (円) ②	① : ② (%)
明治34 (1901)	494,236	960,232	51.47
明治38 (1905)	412,003	785,427	52.46
明治43 (1910)	1,175,883	1,720,513	68.34
大正3 (1914)	768,862	1,402,685	54.81

出典：本渡市教育委員会1961：249頁

『天草の歴史』によれば、最もよく獲られていたのはイワシであった。これは肥料にするために、加工されたり、丸干しにされたりした（田中－1982）。

漁法と記録

天草の三大漁法は、鉾突漁（「突鉾」）、潜水漁法、八田網（八田網模型）である。

鉾突漁は魚を突き刺して獲る方法である。『熊本県漁業誌』によれば、川や浅水域で四人から六人が一つのボートに乗り、鉾を持って魚の頭を突く。鉾をもつ者は二つのグループに分けられ、一グループは前に立ち、他は中央部に立つ。ボートは船尾の二つの櫓で動き、鉾を持った者が近くを泳ぐ魚を素早く突くのである。

潜水漁法は近世に発達した漁法であるが、壱岐・対馬地方では約5000年前から行われ、朝鮮半島にも普及した。漁師が魚介類を獲るために海に潜るのである。この漁法は主にアワビや海藻、また、タイなどの魚を獲るためにも行われる。波が高い間は、漁師たちは漁具を船につなぎ、自身は海に入って、再び波がおさまるまで待つ（『熊本県漁業誌』、五和歴史民俗資料館展示「潜水漁法」）。この漁法は二江地区で始まったものである。明治時代初期の統計によれば、その最盛期にこの漁法を用いた者は5,030人にも上った（田中－1982）。田中は、人々がこの方法を応用して海に沈んだノルマントン号というイギリス船から見事に乗客を助け、この功績により表彰されたことについても述べている。

天草における他の漁業記録は、船の改良と牛深町の深川勇次郎、卯次郎兄弟による安全規則に関するものである（田中－1982）。彼らは肥料用のイワシの乾燥法に関しても多大な貢献をしている。

信仰

漁師たちは船の聖霊である船霊様の儀式を信じている。新たに船を建造する際には、彼らは海での安全と大漁を願って船の安全な場所に聖霊のシンボルを据えるのである。このシンボルは大抵、帆船であれば帆のマストに、モーターボートであれば機械の前面に、そしてボートでは右側に据えられる（五和歴史民俗資料館展示「くらしと信仰 船霊様」）。

2. 富岡の漁業

富岡は天草の小さな村だが、漁業で有名である。同村は近世以来、天草の政治的・文化的中心地であった（平凡社－1985）。

位置

富岡村（町）は現在の苓北町に属する村で、天草下島の北西端である（図1参照）。主たる地区は富岡半島となる。陸上・海上の両方に志岐村との境界があり、南東にかけては三会川により区切られている。北の向かいの半島は長崎県の野母崎半島である。西は天草灘（または東シナ海）である。半島として富岡村は海に囲まれ、苓北町本体と結ぶ細い陸地をもつ。このような地理的環境から、富岡の人々にとっては、熊本県内陸よりも長崎県へ行く方が便利である。富岡－島原（長崎県）間と、富岡－長崎間は、海路でそれぞれ15里と21里であり、富岡－熊本間は海路で20里、さらに陸路で2里である。富岡から江戸（現在の東京）はおおよそ464里、約1,800kmに相当する（平凡社－1985）。

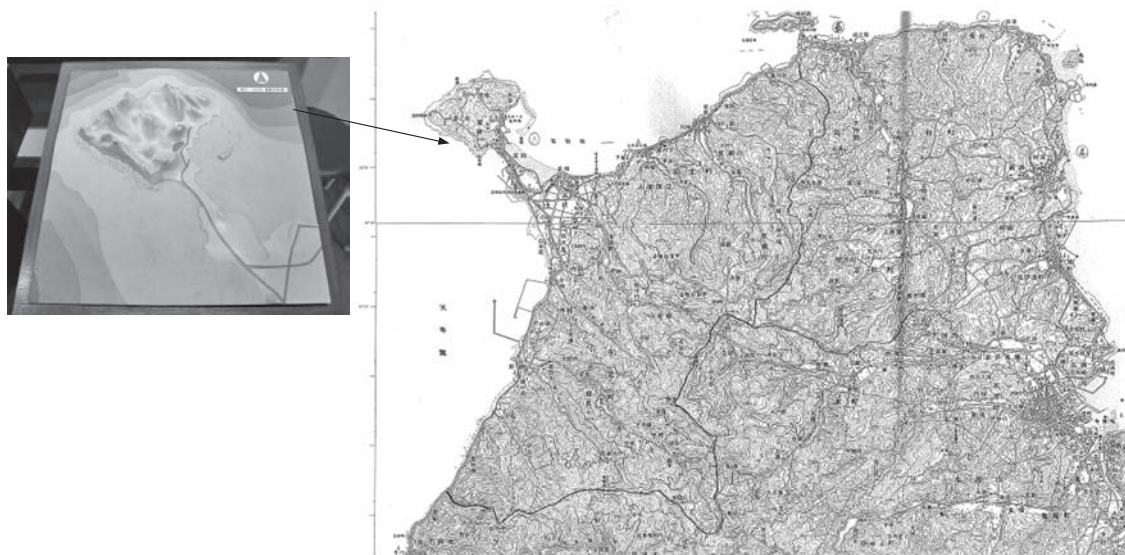


図1 苓北町と富岡の地図

地名

富岡村は袋（福路）や留岡といった多くの別名をもつ。前者は地形の特徴からきており、後者は「トメオカ」が転訛によりそのようになったと考えられている「トミオカ」の語源である（角川－1987）。

地理的特徴

苓北町と同様に、富岡半島には何世代にもわたる海と陸の相互作用の影響により東部に砂洲の形成が見られる。この現象は現在も続いており、半島東部における湾曲した砂丘の形成により説明され、富岡湾の船にとって安全な入り江となる（図2参照）。それゆえ、この港は袋湾や巴湾といった別名を持つのである（平凡社－1985、角川－1987）。この天然の港湾は、富岡の位置関係とともに商業上大きな役割を演じ、後には、近代を通じて文化的、政治的にも貢献したのである（平凡社－1985）。



図2 富岡における砂洲形成の過程

出典：富岡城ビジターセンター展示（筆者撮影）

しかし、富岡の西部では、強い波により起こる浸食と硬い岩が未加工の大きな原料を作り出している。また、この波は北から富岡半島に硬い廃石を運び、島の東部にそれらをためるのである。

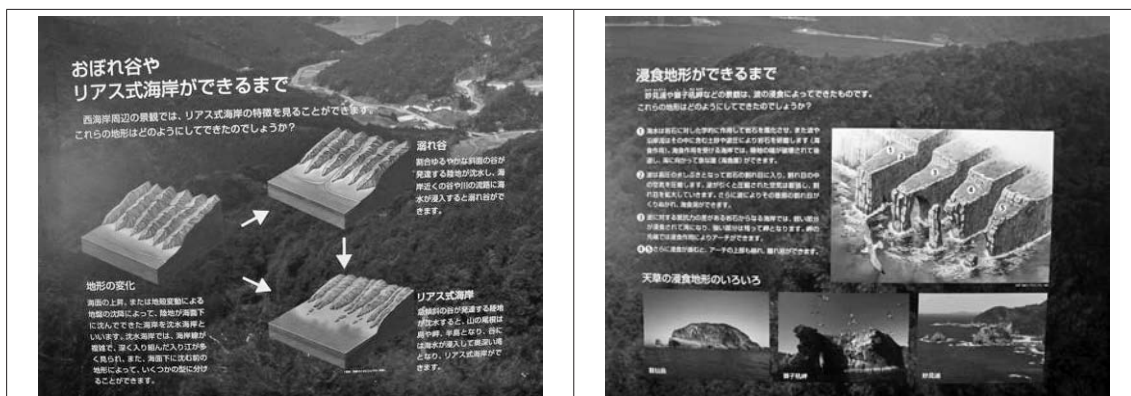


図3 天草の驚くべき地形を作りだす海と陸の相互作用

出典：富岡城ビジターセンター展示（筆者撮影）



図4 富岡の南部にある九州電力苓北火力発電所を望む眺め

出典：2010年7月（筆者撮影）

自然と生物

一般的に言って、富岡には森が少なく（苓北町－1984）、これが、特に寒さの厳しい冬の間は人々にとって木材や燃料の確保を難しいものになっている。水田に適した土地も少なく、天候も農業には向かない。しかし、近くを流れる暖流のおかげで（図5参照）、この付近はイワシなど幾つかの魚の回遊ルートになっている。結果、イワシは水産業で最も収益性の高い漁獲物となっている。



図5 日本における寒流と暖流

出典：北海道厚岸海洋博物館展示（筆者撮影）

歴史

富岡村がいつ頃からできたのかについては明らかではないが、富岡の隣村である志岐村近くからの出土品や史跡などから、長い歴史があるものと思われる。

富岡村への定住の記録は古墳時代（3世紀～7世紀）から見られる。ここで調査をした考古学者たちは古墳時代の製塩遺跡を発掘した（五和歴史民俗資料館展示「歴史年表」）。天草式古代製塩土器（図6参照）による製塩とその技術は、古墳時代の富岡の大きな特徴である。さらに、この地域における製塩の記録については多くの書物に記述がある。製塩の発達により国内の他の地域や他国との取引も可能であった。



図6 古代製塩土器三種

出典：五和歴史民俗資料館展示（岡本弘道撮影）

しかし、富岡の歴史が転機を迎えたのは1589年（天正17）の天草合戦からである（五和歴史民俗資料館「歴史年表」）。封建制の幕府は富岡に役所を置き、天草地方を統治した。それ以前に築かれていた富岡城も行政的に利用された。以降、富岡は長きにわたり天草の中心としてその重要性を持ってきたのである。

1637年（寛永14）、天草と島原で一揆が起きた。富岡ではキリスト教徒と関係がある史跡がいくつか見られるが、天草の他地域と比較してキリスト教徒の影響は強くなかった。理由の一つは富岡に見られる幕府の強い影響力によるものであろう。

江戸時代には、富岡の水産業の歴史において大きな出来事があった。1645年（正保2）には、沖合漁業のために天草の7区画を開放し、漁師たちに従来よりも沖合での漁業を奨励して水産業の拡大を促進する政策がとられた。この政策の下、これら7区画は厳格に管理され、幕府への税も引き上げられた。これにより、居住地としても通商の地としても富岡の発達は促進された。この結果、江戸時代には、富岡と同様に天草の人口に関してもかなりの増加がみられた。

天草、とりわけ富岡は、明治時代に幾度も政治機構上の変化を経験した。富岡県は天草県となり、その後、長崎県と合併し、長崎県天草部として長崎県の一部とされた。さらに、1872年（明治5）に八代県と、1874年（明治7）には白川県と合併し、最終的に1877年（明治10）に熊本県の一部となった。北方に位置する長崎県との強い文化的・経済的関係を示しつつも、他の天草の地域と同様に、富岡村は現在も熊本県に属している。

富岡村の領域と統治

富岡村の名と富岡への人々の定住は江戸時代初期より始まった。しかし、これは中世からの富岡城の建設にも密接に関係している。一般的に近世には古いものの上に新たな城が建てられた。富岡城は1601（慶長6）年に、東西1,420間、南北950間であったと記されている（角川－1987）。

天草・島原の乱の後、富岡城は数百メートル拡張された。このため、富岡城の全長・全幅に関する統一された記述はない。例えば、「天保郷帳」の中で279石余としているが、「旧高旧領」では285石として

いるなどである。また、1602年（慶長7）にはさらに、ふくろ町、さこ町、上町、下町、寺町、かこ町と呼ばれる二の丸、三の丸があったとされる。一町目から五町目の村の区画は、1637年（寛永14）の天草・島原の乱の後、二町目の地域を含む城の拡張が行われたころから始まったものである。1755年（宝暦5）には以下のような記述がある（角川—1987）。

富岡町は田高126石余・反別11町8反余、畑高65石余・反別17町8反余
町の長さは横1町程、うち下船津町80間余、1町目97間程、2町目97間程、3町目135間程、4町目90間程、5町目180間程、新町210間程（抜粋引用）

人口

人口は村全体に分布してはいるが、富岡城の南方と富岡湾側面に多い。富岡半島と荅北町を結ぶ狭小な土地に五つの集落が連続的に横たわっている。

1755年（宝暦5）の人口は1913人、373世帯であった。4家族のみが水産業を専業とし、他は農業との兼業であった。商職人、小間物商人、医者、家大工、船大工などといった水産業とは関係のない者たちが新町と出来町に住んでいた（角川—1987）。

1891年（明治24）には、人口が3,502人、687世帯に増えた。1907年（明治40）に3,651人、650世帯となり、1915年（大正4）には4,003人、654世帯に増加した。1920年（大正9）、世帯数は754世帯に増えたが、人口は3,482人に減少した。1929年（昭和4）には世帯数は666世帯に減少したものの、人口は3,846人へと再び増加した。1935年（昭和10）と1950年（昭和25）には、それぞれ687世帯3,169人、863世帯4,059人であった。1950年には4,000人を数えたが、うち619人が農家、246人が漁師、153人が被雇用者、125人が実業家、125人が運転手その他情報関連の仕事に従事する者などであった（角川—1987）。特に1905年から1935年にかけて、世帯数が増加すると人口が減り、人口が増えると世帯数が減少していることは興味深い（表2参照）、一世帯当たりの人口は一定で5～6人である。比較的高い世帯当たり人口は二、三世代が一つ屋根の下に暮らす農業家族の構成に多くみられる。

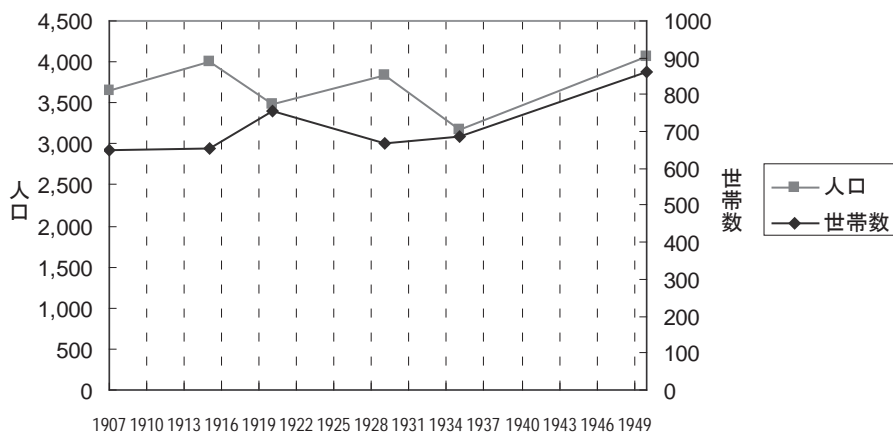


表2 富岡町の人口と世帯数（明治40年から昭和25年まで）

出典：『角川日本地名大辞典43〈熊本県〉』1987年

3. 富岡における漁師と海の生活

漁業人口と分布

1755年には、漁師たちは海が静かで安全な港である村東部の海岸線に沿った一町目から五町目にかけて住んでいたと記録されている。漁師の家は村の373世帯のうち、90分の1でしかなかった。1950年には人口4,059人のうち246人が水産業を専業としていた。これは人口の6%以下である。これらの統計は水産業を専業とする人口と世帯が非常に少ないことを示している。これは著者が2010年7月の天草フィールドワークで見たものと完全に一致している。港の近くでさえ、そのような沿岸部で見られるべき活発で賑わいのある生活様式を筆者がみることは稀であった。数キロメートル離れた通詞島の港を訪れた際も、情景はほぼ同じであった。

漁師の世帯はまとめて居住しているわけではなく、実業家や農家などと同じ地区に分散している。一町目から四町目と新町にかけての2日間の実地調査により、これが明らかになった。この間、船や漁具のある漁師の家と思われるものは、ほんの3、4軒しか見られなかった。さらに、これらの家々はどれも海や湾ではなく道に面していたが、いくつか海面に向けた裏口をもつものもあった。それら家々のほとんどが幅10mほどの道で海との間を隔たれていた。この理由の一つは、海が荒れる日の強い波から説明できよう。他に考えられるものとしては、富岡湾東部で現在行われている新たな農業地帯の形成だ。通詞島と比較するならば、港の先端から家までは著しく近く、居住空間はすべて南の海岸線に面している。家の向きはおそらく南向きがよく、東向きは不吉とする中国の風水に基づいて決められていると思われる。しかし、それ以上の結論を得るためにはさらなる科学研究が必要である。



五和歴史民俗資料館から通詞島港を望む景色



富岡城から富岡港を望む景色

図7 富岡港と通詞島港の景色の比較

出典：2010年7月（筆者撮影）

漁場

1645年の政策により、漁師が沖合漁業を営むことができる漁場は以下のように定められている（荅北町―1984）。

当町前海 東はのふ瀬を境、北は御城山より三里半、此間五里半。東北之間沖三里、但富岡二江浦立会右同断壺ヶ江、当町後海、南は大ヶ浦を境、西は御城山より五里、此間十里、西南之間沖八里、但富岡崎津村立会とあり、この魚場は幕末まで変便がながった。

漁業活動と漁獲物

1755年には56の船があり、うち12が廻船、19が作船であった。1750年の漁獲物は、魚はタイ、コチ、黒魚、のうそ、アラ、ぶぼら、あご、やず、ひさ、すわみ、タコ、ひらす、スズキ、カツオ、カマス、いつさき、マグロ、イワシ、キス、らん、イカであった。貝類及び磯物類では、アワビ、こうかい、サザエ、ハマグリ、ウニ、がぜ、カキである。苔類では、ふのり、かんのり、杉のり、松のり、海藻類では、ワカメ、ヒジキ、あらめ、アオサが獲れた（荅北町－1984）。1984年まで、これらはほぼ変わっていない。そのなかでも二大産品はイワシと海藻である。食用とされるものはごく僅かであり、ほとんどは



図8 天草と長崎の家の屋根に見られる鯱

肥料へと加工される。

1799年に、富岡と志岐の間で、指定された漁場で海藻をめぐって争いが起きた（苓北町—1984）。この後、「若布は富岡漁師の勝手取り、藻は志岐百姓の採取に委せる」となった。

筆者が天草での実地調査で見つけたものとして興味深かったのは、魚の形の屋根飾りである（図8参照）。つまり、鯪であった。最初に見られたのは棚底で、次は富岡、驚くことに長崎でも見られた。

それらのどれもが曲がった尻尾を上に向けた形をしているが、その具体像は一様でない。例えば、天草の魚の頭は、長崎のものが穏やかな顔をしているのに比べて恐ろしい形相である。さらに、富岡のものにはさらに恐ろしくみえるような角が何本もついている。天草の歴史において、これらの魚の形相が、例えば網主のような家主の階層的な力と関係しているのかどうかは、著者には未だ明らかでない。

さらに、どのような家がこの飾りを用いており、それらの関係がどのようなものであるのかということについても不明だ。富岡で飾りのある家々の位置を定義付けようとしたが、それらの家々は互いに無関係で、そして分散しており、筆者は何らの結論をも導くことができなかった。一つの仮説は、それらの家々が互いに血縁関係にある可能性である。残念ながら、時間的制約と富岡では漁師たちに会う幸運に恵まれなかったため、著者はこの点を明らかにすることができなかった。願わくば、この特徴に注目し、さらなる探求をする者があれば、この村の豊富な有形文化遺産にまつわる興味深い話が見つかるかもしれない。加えて、それは観光客を惹きつける無形価値を生み、日々動いている住民の静かな暮らしを活性化することだろう。

要 約

総括すると、天草は特に長い海岸線など多くの有利性を持っているにもかかわらず、水産業は住民の大多数にとって主要かつ専門的な職業とはならなかった。1645年に幕府が地域住民に漁師として働くことを許可した後でさえも、多くの人々は、漁師よりもむしろ生来の農民としての生活を続けた。同時に、危険、不安定といった漁師の難点も、無煙炭や鉄道の興隆と相まって、水産業と漁師の拡大の障害となった。漁村はわずかで、大部分が天草の東海岸あるいは南海岸に位置している。他の村ではごく少数の世帯が水産業を専業とするのみで、他の村民は農業と水産業のかけ持ちか、他に主たる職業を持ちながら沿岸部で水産活動に携わるだけである。

富岡村は、特に江戸時代において、先駆的漁師であり八田網を発明した鮫島十内により、天草でも有名な漁業集落であった。しかし、近年では港の空間以外にはそこが漁村であったことを示すものはほとんどない。以前の活気のある生活を取り戻すため、この村の有形・無形の価値を「発掘」するよう、研究者たちがさらに邁進することが望まれる。

【参考文献】

『熊本県漁業誌』上・下、1889年

高田源清「天草漁村の実体調査——特に下島西海岸及び北海岸地帯」(『九州文化史研究所紀要』第2号、1951年)

中村正夫「肥後国天草島における漁村の成立と展開——「舸子役」を中心として——」(『九州大学九州文化史研究所創立二十五周年記念論文集九州文化史研究所紀要第8・9合併号』1961年)

『天草の歴史』本渡市教育委員会、1961年

田中昭策『天草歴史談叢』私家版、1982年

角川日本地名大辞典編纂委員会編『角川日本地名大辞典43熊本県』角川書店、1987年

『日本歴史地名大系第44巻 熊本県の地名』平凡社、1985年

苓北町史編さん委員会『苓北町史』1984年